

2025 年度

高校生社会イノベーション選手権大会報告書

主催：徳島大学 i.school

共催：(一社)日本社会イノベーションセンター



△イノベーション編当日の集合写真



△イノベーション編 WS の様子



△イノベーション編発表の様子



◁WS で用いた付箋

運営メンバー
及び審査員▷



大会概要

○イノチャンとは

高校生社会イノベーション選手権（以下イノチャンと表記）は、イノベーションを学び実践する場を高校生に提供することを目的として設立された大会です。

イノチャンは、2018 年度から 2022 年度まで 5 年間東京大学大学院工学系研究科社会基盤学科及び東京大学社会基盤学科に所属する学生有志により実施されました。その後、徳島大学 i.school 修了生から大会復活に対する強い要望があり、2025 年度イノチャンは徳島大学 i.school 主催、(一社)日本社会イノベーションセンター共催により実施されました。企画・運営は、徳島大学 i.school 修了生を中心とする学生有志 15 名で行いました。

本大会は、「問題分析編」と「イノベーション編」から構成されています。本年度は、「未来のお祭りデザイン～祭りをアップデート～」をテーマとして大会を開催しました。

「問題分析編」には、4 校 11 チーム 50 名からの応募があり、審査により選抜された 5 チームが「イノベーション編」に参加しました。イノベーション編では、テーマに沿って運営が設計したワークショップ(以下 WS と表記)に沿ってアイデア創出に取り組みました。普段の授業では扱わない課題に悪戦苦闘する姿も見取れましたが、どのチームも互いに協力して最終的には優劣のつけ難い素晴らしいアイデアを創出しました。

○大会日程

2025 年 6 月 1 日(日)	問題分析編募集開始
2025 年 6 月 30 日(月)	問題分析編募集締め切り
2025 年 7 月 18 日(金)	問題分析編結果発表
2025 年 8 月 17 日(日)	イノベーション編

○運営組織

主催：徳島大学 i.school

共催：(一社)日本社会イノベーションセンター

企画・運営：徳島大学 i.school 修了生を 中心とする学生有志 15 名

イノチャンコンセプト

「みなさんが社会を変える。イノチャンはその第一歩です。」

「みなさんが社会を変える。」この一文を読んで、「高校生の私に社会を変えることなんて果たしてできるだろうか」と思ったかもしれません。確かに社会で様々な経験を積んだ大人は、高校生ひとりひとりよりも社会や科学技術についての知識量、あるいは課題を正確に理解し解決するスピードにおいて勝るかもしれません。では同級生数名で協力して、ならばいかがでしょうか。教室を見渡してみてください。それぞれ異なるバックグラウンドや得意分野・興味関心を持っていますよね。みんなの知識や経験のかけらを集結させると何か新しいイノベーションが生まれそうな気がしませんか？

イノチャンでは様々な分野で学んだ知識はもちろん、自分や周りの人の体験を組み合わせることで“社会イノベーション”を起こす新しいアイデアを作り出してもらいます。社会イノベーションとは社会問題の解決、あるいは新しい価値の実現を目標とした、新たな技術や仕組みの導入により生まれる人々の行動や態度の波及的変化のことです。社会イノベーションによってもたらされる効果は私たちの生活そのものに直結しているため、特定の学問分野に執着する必要はありません。また人々がどう感じるのか、どのような体験が得られるか想像することが極めて重要となります。

私たちは、イノベーションは既存の技術やアイデアの組み合わせによって生まれると考えています。全く新しいと思われるアイデアは、実は既存の知識や技術の組み合わせによって創出されます。つまり、天才発明家でなくとも、高校生の皆さんが今まで学んできたことを生かして新しいアイデアを作り出すことは十分可能です。その組み合わせを思いつくために今までの学びの片鱗が役立ちます。常にアンテナを張って多くの情報に接すること、時には他の人の話を聞いて新たな価値観に触れることでたくさんの引き出しを持つことができます。ただし、それだけではアイデア発想には不十分なのです。私たちが地道にアイデアを生み出すためにはある一定の思考プロセスを経ることが極めて重要です。決められた思考方法のもといくつかアイデアを出すことで、複数のアイデアを一定の土俵の上で比較検討し磨きをかけることができます。また本当に必要な知識や視点は何だったのか振り返ることでアイデア発想の方法論そのものを改善し以前と全く違うアイデアにたどり着くことができます。このような一連の流れを高校生の皆さんが実践する場としてイノチャンが誕生しました。

イノチャンは社会イノベーションのアイデアとその創出プロセスを競う高校生を対象とした全国大会です。情報収集・分析に基づいた課題の本質を見抜く技能や、唯一無二の正解のない課題に対し、互いを尊重しあいながらチームでアイデアを議論する力を養います。中等教育で総合的な学習・探究の時間に力が注がれるなか、その一助としてイノチャンが機能できれば幸いです。高校生の私たちがアイデアを考え抜く、そのアイデアを全国の高校生と共有し新しい視点や価値観を得る。そんな刺激的な体験の場への皆さんの奮ってのご参加を心よりお待ちしております。

活動報告

○イノチャン実行委員会について

本大会実行委員会は、徳島大学 i.school の修了生を中心として 15 名により構成されています。運営メンバーは、それぞれに知りたいこと、目標を明確にし、活動に取り組みました。慣れない業務に直面する場面もありましたが、運営メンバーは学科や学年の垣根を越えて連携し、それぞれの得意分野を生かしながら補完し合うことで、大会を無事に実施することができました。

開催にあたっては、徳島大学 i.school をはじめとする先生方に多大なるご助言とご支援を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

本大会に多くの高校生の皆様にご参加いただき、現地開催ならではの対話や学びが生まれたことは、本企画の大きな成果であったと考えております。本大会を実施するにあたり、携わって頂いたすべての関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

○顧問紹介

大会プロデューサー：北岡和義 先生(徳島大学 教養教育院創成科学分野 准教授)

大会ディレクター：小松崎俊作 先生(広島大学 IDEC 国際連携機構 特任准教授)

大会マネージャー：玉有朋子 先生(徳島大学高等教育研究センター 特任講師)

○実行員会名簿

・徳島大学総合科学部

学生代表：石井千(B2)、副代表：藤崎夏帆(B2)、佐藤りさ(B2)、氣谷愛良(B2)、富岡祐生希(B3)、佐野愛斗(B4)

・徳島大学医学部

赤澤然(B3)、青木桃子(B2)

・徳島大学生物資源産業学部

西田大連(B4)、氏久菜々美(B4)、高田太陽(M1)

・徳島大学理工学部

猪股研斗(M1)、小山司(B2)、橋本たかし(B4)

・社会人

安藤悠馬((株)ジオグラフィックデザイン)

計 15 名

○各部門の活動

1. 運営

本大会の運営にあたって、イノチャン運営メンバーが担った主な業務は、運営ミーティングの実施および参加高校生・顧問教員との連絡調整です。大会準備期間中は、定期的に運営ミーティングを行い、大会全体の進行確認、問題分析編およびイノベーション編の業務管理、役割分担の整理などを行いました。

た。また、参加高校生および顧問教員に対しては、課題内容や提出方法、日程に関する案内、問い合わせへの対応などを、主にメール等を用いて行いました。これにより、参加者が円滑に大会へ参加できるよう、必要な情報の共有と調整を図りました。

これらの業務を通して、運営メンバーはイベント運営における基本的な調整業務や、教育プログラムを実施する上でのコミュニケーションの重要性を実践的に学びました。限られた人員および準備期間の中で大会を実施するにあたり、継続的な情報共有と丁寧な連絡対応が、大会運営を支える重要な基盤となりました。

2、WS 設計及び問題分析編課題設定

問題分析編では、大会テーマに即した思考と分析を高校生に促すことを目的として、運営を担う大学生が中心となり課題設定を行いました。課題設定にあたっては、テーマに関する社会的背景や先行事例を踏まえつつ、高校生が自ら情報収集・分析を行い、社会的ニーズを抽出できる構成となるよう工夫しました。この過程において、運営メンバーは森田棕也先生の協力を得ながら、テーマに関する基礎的知識や分析の視点について学び、課題の質の向上に取り組みました。具体的には、文献調査や事例分析を通じてテーマ理解を深めるとともに、どのような問いが高校生の主体的な思考を引き出すかについて検討を重ねました。

また、WS 設計では北岡和義先生、玉有朋子先生のご指導の基、イノベーション編で行ったイノベーションワークショップの設計を行いました。（※イノベーションワークショップとは、堀井秀之氏によって開発されたイノベーションを実現するアイデアを創出するための思考法をワークショッププロセスとして設計したものです。）また、運営メンバーによるプレワークによって修正を行ったことにより高校生の皆様にとって満足度の高いWSが提供することが出来たのではないのでしょうか。

3、広報

大会の広報につきましては、徳島県教育委員会のご協力のもと徳島県内各高校に向け電子媒体による大会フライヤーの配布を行いました。

また、運営メンバーが徳島市内を中心とする高校に訪問をし、大会の概要説明を行いました。本活動の実施にあたり、ご多忙の中にもかかわらず、事前のご調整から当日の運営に至るまで多大なるご協力を賜りました県内高校の先生方に、心より御礼申し上げます。

4、財務

本年度は、PSI の EDGE-PRIME 予算内で審査員旅費 18 万円、審査員謝金 15 万円を頂戴しました。本大会の開催にあたり、PSI より多大なるご支援を賜りましたことに、心より感謝申し上げます。ご支援により、本大会を円滑に実施することができました。

2022 年度までのイノチャンにおいて協賛企業の皆様からいただいた資金の繰越金を活用し、大会休止期間中においても教育普及活動やホームページの維持管理などの基盤整備を継続させていただくことが出来ました。これらの取り組みにより、本大会の再開に際して過去に関わりのあった高校からの参加が見られたほか、他県の過去参加校関係者からも復活・再拡大に向けた強い要望が寄せられております。これまで大会を支えていただいた協賛企業の皆様に、改めて深く感謝申し上げます。

問題分析編

問題分析編では、地域のお祭りが抱える問題やニーズの分析を運営側が用意した課題に沿って行っていただきました。

○課題内容

問1：地域に受け継がれてきた祭りの背景や担い手、参加の意義を調査・分析

高校生の身近にあるお祭りに関して、誰が、いつ、どんな目的で行っているかを資料及び聞き込みにより調査・分析をしてもらいました。

問2：国内外の伝統的な祭りについて、その存続の担い手・理由・背景を調査・分析

高校生の地域外で伝統的に存続している祭りに関して問1のように調査を行ってもらいました。

問3：上記二つの祭りを比較し、共通点を踏まえた上で、祭り継承に必要な要素を考察

問1と問2で調査したことを基に、未来に続くお祭りのニーズや未来のお祭りに繋がるヒントになりうる事実の分析を行っていただきました。

問題分析編には、4校（徳島県立脇町高校、徳島県立城南高校、徳島市立高校、徳島県立小松島西高校）11チーム50名が参加しました。イノベーション編に出場する6チームを決定しました。

○問題分析編・詳細

1. 応募期間

応募開始	2025年6月1日(日)
応募締め切り	2025年6月30日(月)

2. 応募資格

対象は高等学校・高等専門学校生徒とします。中等教育学校の場合は後期課程の生徒（4～6年生）を対象とします。

1チームの構成人数は4～6名とし、複数校による混成チームは認めます。

3. 応募方法

以下の二つ。

オンラインフォームでのエントリー

以下を添付したメールを（inochan.tokushima@gmail.com）まで送付。

課題に対する解答

手書きで情報を記述して写真を撮ったもの、またはデジタル制作したポスター、スライド、ドキュメント等、形式は問いません。

4. 審査基準

現状分析・課題発見力

課題に取り組んだプロセス

分析結果の論理性と論拠（エビデンス）の明確さ

○成果物

高校生が実際に提出した成果物の内、評価の高いチームの成果物いくつかをご紹介します。

①徳島県立城南高校、小松島西高校混成地チーム 「祭 Re(まつり)チーム」より

問1に対して、徳島市で行われる秋祭りについて調査を行っていました。「昔の子供たちは神輿回しを楽しみにしていた」などの祭りの概要を詳しく記載するだけでなく、地元の方への聞きこみ調査を行い明確なニーズの分析に取り組む様子が確認できます。

秋祭り

- ・ 場所: 徳島市 応神町(東貞方)
- ・ 日時: 10月14日、15日の2日間
- ・ 概要

当家(総代)、脇当、神輿渡御(神輿を担ぐ人とそれに付き世話する人)の役割が毎年正月に町内会で決まる。

当家を中心に、武威神社に保管されている神輿を出し、町内を練り歩く。

少子高齢化で神輿を担ぐための人手が足りず、近年は軽トラやリアカーで運ぶ。

神輿に乗るのは男児で、選ばれた男児は毎晩のように太鼓を叩く練習をする。

選ばれた女児は巫女となり、「うらやすの舞」を舞う。

昔の子どもたちは「神輿回し」を楽しみにしていた

・ 背景

地元に住む人でも分からないほど昔から続く(武威神社の狛犬には文政四年と記載されていた)

豊年万作を記念すると同時に町内会の親睦会的役割もある

この秋祭りは7年前まで続けられていたが、当時の神主と総代の揉め事がきっかけで取りやめとなった

3年前に1度復活したがコロナ禍などによりその後～現在も休止中

・ 地元の方(70～80代)たちの気持ち(今後どうなってほしいか)

現在祭りは休止中のため、復活してほしい

しかし、農家は減り続け、若い世代は祭りに関心がないように思う

自分たちは歳をとり、もう続けるための体力がない人の方が多くなってきているから若い人たちに継承して行ってほしい

②徳島県立脇町高校「again」より

問3 に対する取り組みに対して、3つのお祭りを表形式で簡潔にまとめています。

それぞれの祭りについて時期や目的を分けて整理をすることにより気づきが具体的に記載されています。

問3 3例の比較

	川田八幡神社例大祭	大洗祭り	聖ルイス祭	気づいたこと
誰の	氏子の団体	大洗の祭り実行委員会 大洗町商工会	ブニョール市役所	地域全体をあげた主催の 他、有志の方々による主催 がある
時期	毎年夏と秋	毎年11月	毎年8月	秋と夏の2回と冬の一回と いう違いがある
目的	地域の団結強化	地域の活性化	地域の活性化	「地域」にどちらも焦点を当 てている
意義	五穀豊穡への感謝	地域復興や観光客誘致 震災の復興支援や地元へ の恩返し	キリスト教徒の聖人を 祝う	神様への感謝に 比べ俗物的

イノベーション編

イノベーション編は、2025 年 8 月 17 日に徳島大学フューチャーセンターで開催され、問題分析編審査より優れた評価を得た上位 6 チームが出場、2 校 5 チーム 24 人（徳島市立高校、徳島県立脇町高校）が参加をしました。

当日は参加高校生に対し「未来のお祭りデザイン～祭りをアップデート～」をテーマとしたイノベーションワークショップを実施しました。

運営メンバーは、高校生のチームに入り WS 進行の補助及び助言を行いました。

イノベーションワークショップに則り、複数の事例から未来に必要とされる祭りのニーズを考え、現在存在するテクノロジーと掛け合わせた手段アイデアを考える WS となっております。高校生は付箋を用いて WS を行いました。

○タイムスケジュール

8 月 17 日	
10:00	開会・イントロダクション
10:00~15:00	イノベーション WS
15:00~17:00	発表・審査員講評

○審査員紹介

本大会の審査員をご紹介します。

堀井秀之氏



1980 年東京大学工学部卒業、米国ノースウェスタン大学大学院博士課程修了。東京大学大学院工学系研究科教授として、社会基盤学の構築に尽力し、技術を社会に実装するための「社会技術」を提唱。2009 年より同大学にてイノベーション教育プログラム「i.school」を創設し、エグゼクティブ・ディレクターとして人間中心のイノベーションを生み出すワークショップ手法を確立した。これまで数多くの学生や社会人に創造的課題解決の技法を授け、変革の担

い手を育成してきたイノベーション教育の第一人者。現在は一般社団法人日本社会イノベーションセンター（JSIC）代表理事として、産学官の壁を超えた対話の場「Innovation Dialogue」を主宰するほか、AI を活用した「熟達者 AI」の開発など、テクノロジーと人間の共創による新しい学びの形を探究し続けている。著書に『問題解決のための「社会技術」』、『イノベーションを生むワークショップの教科

書』など多数。

小松崎俊作 氏



東京大学工学部土木工学科卒業、同大学院にて博士（工学）を取得。また、米国ラトガース・ニュージャージー州立大学にて修士（政策科学）を取得し、工学的合理性と政治学的合意形成の両面から社会課題にアプローチする専門家。主な研究テーマは、インフラ施設や廃棄物処分場などの立地に伴う NIMBY 問題（施設忌避）における住民意識と政治過程の分析。経済的インセンティブの限界や熟議の重要性を説き、対話による合意形成のあり方を模索している。現在は広島大学にて、グローバルな視野とローカルな

実践を融合させた「Innovation Program in HIROSHIMA」のプロデューサーを務め、次世代のアントレプレナー育成に注力。「アジャイル・ワークショップ」などを通じ、失敗を恐れず挑戦するマインドセットを学生に伝えている。科学技術振興機構（JST）フェローの経験も持ち、科学技術イノベーション政策の実践的展開を推進している。

井上琢斗 氏



遺伝子工学分野で修士号を取得し、行政機関での勤務経験を持つ異色の地域プロデューサー。徳島県三好市にて地域おこし協力隊として活動。その後、合同会社 ZINEN を設立し、地域の古民家を再生したグランピング施設

「MATOBA」や、AI・探究学習を取り入れた自立探究学習塾「ティール」を運営するなど、教育と観光を軸にした地域活性化事業を展開している。また、三好市複業協同組合（M WORK）の理事長として、特定地域づくり事業協同組合制度を活用した「複業（マルチワーク）」モデルを推

進。季節ごとの労働需要を組み合わせることで年間を通じた安定雇用を創出し、若者が地域で自分らしく働くための新しいライフスタイルを提唱・実践している。「あるがまま（ZINEN）」の地域の魅力を掘り起こし、次世代につなぐ活動に情熱を注ぐ。

○イノベーション編結果

大会優勝アイデア

徳島県立脇町高校「焼き肉のタレ」『VR で生まれる友情はココにアール!!』

概要

日本にきた外国人労働者が日本人と交流し、日本（日本人）になじむために職場の同僚たちと VR で全国の花火大会に参加する。そして、外国人労働者はどうりょうたちまたは全国各地の人と VR を通して話すことが出来る。

評価

アイデアの評価には、新規性・有効性・社会的受容性が重視されました。このアイデアは、外国人労働者に対するお祭りという新しい目的を持ったお祭りである、新規性のあるアイデアであったことが評価されました。

アイデア名

VRで生まれる友情はココにアール!!

チーム名 & チームメンバー

焼き肉のタレ

イラスト

アイデア概要

日本にきた外国人労働者が日本人と交流し、日本に(日本人)になじむため、職場の同僚たちとVRで全国の花火大会に参加し、同僚たちまたは全国各地の人と話ることができる。

アイデアは誰のどんな社会課題を解決するか

少子化が進む中、外国人労働者を雇うとは不可決。彼らが慣れない日本で孤立し、作業パフォーマンスが低下してしまう。メンタル的不安や日本と嫌いになってしまう。可能性もある。そのために日本人や職場に慣れることで仕事の効率化を図ることができる。

商人・農家
みんなが
お祭り
として開催

どんな人でも
参加できる。
参加しやすい
祭りだとう
だうう

衰退しているとき
誰と祭りに
集めたいのかもう
ターゲットを決めて
いぼめたのかも。

エンターテインメント
通常の祭りとは
異なる

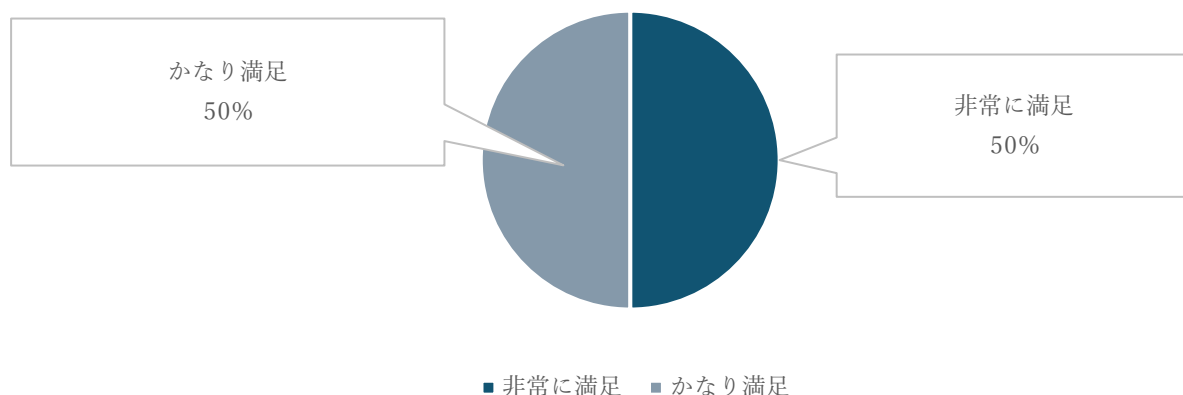
Mike

Mike

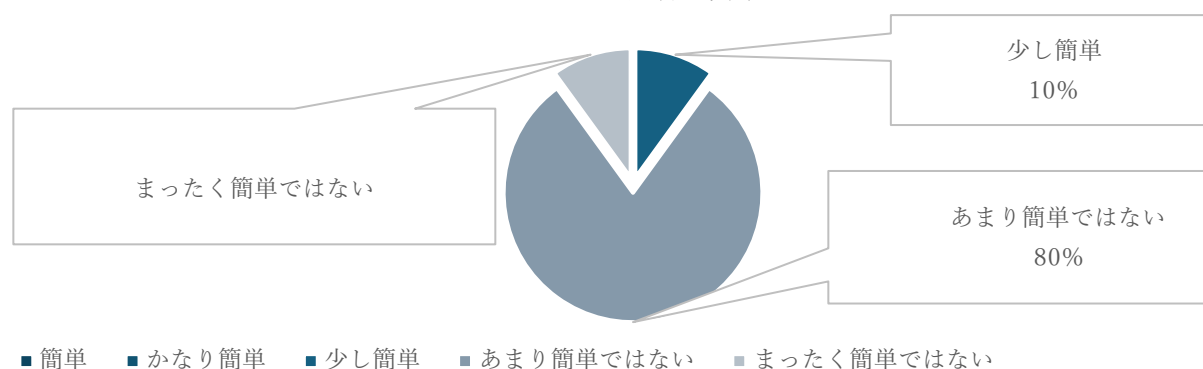
あこ

○参加高校生へのアンケート及び感想

ワークショップの構成・内容についての満足度をお聞かせください。



ワークショップの内容は簡単でしたか？



大会終了後に実施した学生向け事後アンケートでは、ワークショップ全体に対して概ね高い満足度が示されました。

ワークショップの中で印象に残った内容として、「目的分析」「アイデア出し」「発表」を挙げる回答が多く見られました。目的分析については、「アイデアの核となる部分を考えることができた」「目的を知ることによって理解が深まった」といった声があり、課題を構造的に捉えるプロセスが参加者の学びにつながっていたことがうかがえます。また、アイデア出しの工程では、「出した意見を深掘りしていくことが楽しかった」「新しい視点に気づくことができた」といった感想が寄せられました。

感想欄においては、「自分自身、将来は地元で起業をしたい上に現在授業で行っている活動にも今回の経験が活かせる。」や「自分の周りにも課題がたくさんあって、どうしても解決できないときにイノベーションWSが使える」などの意見が寄せられました。本大会は、参加者自身の学習や夢のサポートに繋がる学びを提供できる大会になったと思います。

一方で、「アイデア出しの段階でもっと意見を出したかった」「時間管理を工夫できたと思う」「知識や準備の面で課題を感じた」といった振り返りも多く、参加者自身が課題を自覚し、次につながる学びとして捉えている点も特徴的でした。

おわりに

○学生代表より

私は、高校2年生の時にイノチャンに出会いました。イノチャンを通して、社会を見る目が大きく変わったことを今でも覚えています。当時の私は、いわば「何者でもない普通の高校生」であり、社会についても教科書を通して受動的に学ぶことが中心でした。しかし、イノチャンでは、社会課題について自ら調べ、分析し、その上で社会をより良くするためのアイデアを考えます。その経験を通して、社会は「誰かが動かしているもの」ではなく、「自分たちの問いや行動によって動いていくものなのだ」と実感することができました。問題分析からアイデア創出までの一連のプロセスを学べたことが、私にとって大きな成長の機会となりました。

このような経験を、今を生きる高校生にもぜひ味わってほしいと考え、本大会を再始動することを決意しました。考えることを放棄しAIに判断を委ねることが出来る時代ですが、実際のWSを傾聴していると、議論が深まる問いや、明確な答えのない問いに対して、参加者が懸命に考え、対話を重ねている様子がうかがえました。その姿を見て、本大会を実施できたことを大変嬉しく感じました。

イノチャンは、チームで参加するプログラムです。その中では、意見の対立やすれ違いが生じる場面もあったことと思います。しかし、それらは決して否定的な経験ではなく、むしろ貴重な学びであると考えています。大学生や社会人になってからも、チームで議論する場面は多くあります。高校生のうちにその経験を積むことは、将来につながる大きな財産になると感じています。WSの中でも、互いの意見に首を傾げながら考え直したり、「いいね」という言葉をきっかけに議論が加速したりする場面が見られ、そのプロセスこそが重要であると改めて感じました。

大会は、高校生だけでなく、大学生運営メンバーにとっても多くの学びをもたらしました。一つ目は、イベントを企画・運営する経験を得られたことです。二つ目は、イノベーションワークショップそのものへの理解を深め、各メンバーが新たな問を見つけることができたことです。運営メンバーの多くは徳島大学i.school 修了生ですが、ワークショップ手法を初めて体験する高校生にどのように伝えるかを考える中で、自分たち自身も改めて学び直す必要がありました。その過程を通して、WS手法への理解が一層深まったと感じています。

本大会の企画・運営は初めての経験であった中で、私の思いに共感し、運営メンバーが自発的に集まってくれたことは大きな支えとなりました。また、徳島大学i.schoolの先生方は、本大会を全力でご支援いただきました。さらに、過去大会の学生代表や徳島県立脇町高校の先生から助言いただきました。加えて、広島で行われたi.school所属学生によるWSにも参加させていただき、運営の学びを深めることができました。大会の実施に関わってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

来年度も引き続き、高校生にとって学びのあるイノチャンを提供できるよう、本大会で得られた経験を生かしていきたいと考えています。

○今後について

本年度の「高校生イノベーション選手権（イノチャン）」は、2022 年の休止を経て、徳島大学 i.school 主催のもと 3 年ぶりに復活開催となりました。県内 4 校からエントリーした高校生のみなさんは、「未来のお祭りデザイン」というテーマに対し、独自の視点で鋭い分析を行い、ワークショップでは大学生と共に活発な議論を交わしました。参加者全員が高い満足度を示すなど、本大会が高校生にとって創造的思考力を育む実りある学びの場となったことを嬉しく思います。

復活開催にあたり、多大なるご協力をいただきました審査員の皆様、共催の日本社会イノベーションセンター様、そして参加くださった各高校の先生方や生徒の皆様をはじめ、学内外の関係者の方々のあたたかいご支援のおかげで、本大会を無事に終了することができました。

来年度以降は、対象を徳島県内から四国の高校生へと拡大し、より多様な個性を持った参加者が交流できる場の創出を目指しております。

規模・質ともに拡大して大会を開催していければと考えておりますので、今後とも「高校生イノベーション選手権」をよろしくお願いいたします。

2026/03/17

石井 千